

四・新方川（下千間堀）と周辺地域について 「増林にある湾曲した道（宮野橋・城之上橋間）」

瀧田 雅之

越谷市内を流れる一級河川の一つである新方川は春日部市増田新田とさいたま市岩槻区大戸の境界を起点とし、越谷市中島にて中川に合流する総延長十・九キロメートルの河川であり、古くは「千間堀」と呼ばれ、現在でも流域の地元では「千間堀」の名前で親しまれている。

越谷市郷土研究会の秦野秀明氏の近世後期の絵図の調査により「葛西用水（逆川）」を伏せ越した旧大吉村と旧増林村の境界より上流部を「上千間堀」、増林を経て中島へ至る部分を「下千間堀」と呼んでいたことが判明している。その下千間堀周辺の地図を見るとひときわ目立つ道があるのに気付く。

一、宮野橋の左岸側から城之橋方面へ向かう湾曲している道（付属資料①及び②）新方川の中流域に架かる宮野橋の右岸にある定使野地区は昭和末期に行われた「花田土地区画整理事業」により一変したが、左岸側は昭和三十年代の土地改良事業を経てもなお、かつての原風景の面影が残されている。

その中で、宮野橋の左岸側から新方川から離れるように東方向に弧を描きながら続き、約六百メートル先の鷹匠橋近辺で再度新方川の左岸に沿い城之上橋方面へ向かう道がある。（付属資料①の赤線部）

この道を周辺の道の形状と比べると、成立について幾つかの疑問点が湧いてくる。

・古くからある道であれば、新方川の左岸の土手上に道ができるのが自然である。

・周辺の一般道路や農道と道の形が明らかに違っている。

増林地区の田畑は、昭和三十年代に行われた土地改良事業により基盤整備がなされ碁盤の目の様に整理されているものの、明らかにこの道は周辺の道や地形と比べ異質であることが見てとれる。

現在は周りの田畑を土盛りしたため周辺地と同じ高さになっている区間が多いが、かつては低地の田畑（増林側の田と同じ高さ）の上に築かれた土手上の道であり、さらに昭和五十年頃に舗装工事されるまでは砂利道で両側に日差しを防げるほどの樹木が茂り並木道になっていたことが周辺住民へ聞き込みにより判明している。

二、かつての利根川の本流の旧河道（花田古川）

現在、花田二丁目の宝珠庵（共同墓地）付近の花田第三樋門にて新方川第二十八一号雨水幹線が新方川に流れ込んでいる。この雨水幹線は区画整理前に地元では「古川（花田古川）」と呼ばれた細流が原型となっている。

「花田古川」は現在の元荒川がかつて天獄寺の西側を現在の野田街道に沿うように花田方面へ流れ、大きく花田地区を囲むように回り込み東小林方向へ流れていた大河の痕跡であり、この大河はかつての利根川の本流である。（付属資料①「治水地形分類図」参照）

現在の様に天獄寺前にて右折し直道化されたのは江戸時代初期の寛政年間と推定されている（本間清利（一九七五）『越谷市史 第一巻 通史上』六一四頁）。

越谷市内を北西から南東に流れている現在の元荒川はかつての利根川の本流であり、そのことは利根川流域にのみ形成される火山性の粒子が多く含まれた河畔砂丘が五ヶ所分布していることから立証されている。

かつての利根川の本流は中世までは武蔵国と下総国の国境だった河川である。

「宮野橋の左岸側から城之橋方面へ向かう湾曲した道」はかつての利根川の本流が花田地区を回り込んでいた流路の東の縁の部分であることがわかる。この道の築堤部分はどういった意図で作られたものかは引き続き考察していきたい。少なくとも湾曲した道はかつての利根川の本流の旧河道の名残であると推察できる。

また、武蔵国と下総国の国境が中世まで増林地区にあったことは大変興味深い。